

都市の「隙間」に住まう

— 名古屋市におけるホームレスの居住実践に関する一考察 —

二文字屋 脩

さあ寝よう 夢の中では 一般人 作：沢野健草

[ビッグイシュー日本編集部 (編) 2010 : 85]

I 序

1 「路上に住まう」ということ

本稿は、愛知県名古屋市での実地調査をもとに、一般的に「ホームレス」と呼ばれる人びとの日常生活の重要な側面を構成する居住実践について考察するものである。また本稿では、近年の動向である「ホームレスの不可視化」も視野に入れ、居住実践の基本的特徴とその変容について考察する。

1990年代初頭、いわゆる「バブル経済崩壊」に直面した日本では、多くの労働者が職を失い、住居を失った。だが「ホームレス」¹⁾という言葉が指し示す路上生活者なる存在は、何も90年代以降に特有の存在ではなく、それ以前は「浮浪者」や「ルンペン」といった言葉が一般的であり、「ホームレス」は単にそれらの言い換えに過ぎない[西澤 1997 : 79]。また社会学者の中根が指摘するように、「ホームレス」とは、それまでの「浮浪者対策」や「寄せ場対策」の劣悪さを隠蔽するために設けられた社会問題カテゴリーでもあり[中根 1998 : 1999 : 2002]、決して「新しい問題」[東京都企画審議室 1995]ではない²⁾。むしろこのような存在は、資本主義社会の所産であり[青木 1989 : 108]、貧困の主要な一タイプとされる[岩田 2007 : 99]。

ホームレスにとって、公園や駅舎、地下道、河川敷、高架下といった「路上 (the street)」は主要な起居の場であり、重要な「生存ニッチ (survival niche)」[Hopper 1991]である。それは都市的空間の一部を構成しており、都市に散在しているが、ホームレスにとって「路上」は、社会生活の基点となる重要な空間である。しかしそこは住まうには安定的な空間ではない。なぜなら「路上」とは本来、私有化することの許されない公共空間だからである。とくに都市的空間からの「追い出し」といったホームレスの空間的排除は、「住まう」ことで成立する社会生活を

奪うものである。したがって、ホームレスの居住実践は、「移転 (displacement)」の可能性を常に抱えており、故に「路上」とは様々なポリティクスがせめぎ合う場であるといえよう [中根 1998]。

「住まう」という行為は、まずもって居住地の選択から始まる。またその選択要件は、「暑い／涼しい」や「人が少ない」、「仕事に好都合」といった、生活の安全性や利便性を優先とするものである。確かに、一見するとこれらは一般的な「住まい探し」と何ら変わらぬものであるが、ホームレスを取り巻く社会環境が「他者の場所」としての「路上」であるということが、ホームレスの居住実践を強く規定している。しかしたとえそこが「路上」であろうとも、生きていくためには住まわなければならない。したがって問われるべきは、空間的排除という潜在的危機に晒されながらも、どのようにして「路上」に住まうのかという問いであり、本稿はこれに答えようとするものである³⁾。そこで本稿は、ド・セルトーが概念化したことで広く知られる「戦略 (strategy)」と「戦術 (tactics)」の二つの概念を手がかりに、ホームレスを取り巻く社会環境と、そこでのホームレスの居住実践を分析する。

ド・セルトーのいう「戦略」とは、意志と権力をもった主体の「もののやりかた」をいう [ド・セルトー 1987: 25-27]。それは社会環境から独立した主体が、自己に「固有の場所」でその権力を行使することであり、したがって本稿において「戦略」とは、法的正当性を付与された「行政」という主体による、空間的排除をめぐる権力の行使を指す⁴⁾。そして一方の「戦術」とは、固有の場所を持たず、他者の場所で機会があれば有益なものを得ようとする「もののやりかた」をいう [ド・セルトー 1987: 25-27]。これは大抵の日常実践を構成し、制度的な重圧のなかであって、すなわち「他者の場所」(戦略的主体にとっての「固有の場所」)にあって、組み換え操作 (operation) を行いながら他者の意図をずらし行われる実践である。したがってここでの「戦術」とは、「固有の場所」をもたないホームレスが、「路上」という「他者の場所」において居住を可能にするために行う諸実践を指している。

しかしながら、本稿が注目するのは、これら二つの概念それ自体ではなく、両者の関係性である。なぜなら「戦術」は「戦略」との関係性において初めて意味をもつ概念であり、「戦略」を支えている知とその行使に対して、「戦術」が如何なる実践を創発的 (ポイエティック) に紡ぎ出しているのかと問うことが、ホームレスの生の具体的諸相を捕捉する重要な契機となると考えられるからである。

そこで本稿では、次節にて、本稿で用いる「ホームレス」概念を分析的に考察し、また調査地について簡単に紹介した上で、次章にて、名古屋市行政によるホームレスの空間的排除とその論理を事例に、「路上」における「戦略」を考察し、ホー

ムレスの居住実践を取り巻く社会環境の基本的特徴を明らかにする（第Ⅱ章）。そのうえで、ホームレスの居住実践について、フィールド・データを基に明らかにし、考察を進める（第Ⅲ章）。なお、本稿の事例は、名古屋市のほぼ中心に位置する中区、東区、昭和区での、2007年8月から9月の約一ヶ月間の住み込み調査と、それ以後から現在（2011年1月）に至るまでの、計30回にわたる短期の住み込み調査（各調査期間は五日間から一週間程度）から得たものである。また、調査中は支援活動に部分的に関わっているものの、これらの調査はすべて、「学術調査」として調査対象者の承諾を得て行ったものである。

2 「ホームレス」概念のジレンマ

既に一般用語化した「ホームレス」を、有益な分析概念として構築し直すことは非常に困難な作業である。それはまずもって、概念定義が通文化的に多様であり、またその実態も一語で片付けられるほど単純なものではないからである。そこで本節では、日本と欧米の「ホームレス」概念を簡単に比較し、「野宿者」を用いる日本の社会学的研究の議論を踏まえつつ、この概念のジレンマについて若干の考察を試みたい。

「ホームレス」の輸入元である欧米において "*homeless people*" は、日本のそれよりも広い意味を持つものとして一般的に使用されている。そもそも "*home*" を否定する "*home-less*" という形容詞は、「ホームレス状態 (*homelessness*) にある人びと」、つまり安定した住居を持たず、身の安全を脅かされている人びとのことを指す。したがって路上生活だけでなく、シェルター生活やトレーラー生活、友人宅での居候なども、この言葉は包括している [小玉ほか 2003]。また、例えばイギリスでは、"*homeless people*" のうち、単身のホームレスを "*single homeless*" と呼び、その一形態である路上生活者を "*rough sleeper*" と呼ぶように、それは日本の「ホームレス」のような単層的な概念ではない。

しかしながら、これら「ホームレス」をめぐる多様な概念とその定義は、何も欧米全体で統一的なものではなく、何を「ホーム」とするかについても一様ではない。ただ、少なくとも「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」（第二条）という「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（平成14年法律第105号。以下、「自立支援法」とする）の定義は、欧米に比して非常に狭いものと言える。

寄せ場（労働者）研究ないし野宿者研究の代表的論者である青木がいうように、「形成過程や存在様式、抱える問題の性質において、野宿者は、欧米や途上国のホームレスとは異なる」 [青木 2000: 102]。したがって日本のそれにはネットカフェ難民や飯場生活者、施設入所者、無料低額宿泊所利用者などは含まれず、「ホー

ムレス」概念のみに依拠した単純な通文化的研究は困難かつ、あまり生産的なものではない。なぜなら、「ホームレス」は「日本の野宿者の分析概念としてあまり用をなさない」[青木 2000:102]からである。

そこで日本の社会学的研究においては、もっぱら「野宿者」が分析概念として用いられている。これに関して再び青木を引用すれば、「結局一番肝心なことは、野宿を強いられている問題の核心をどう考えるかということにある」[青木 2000:104]。この一文には、社会学的研究のもっとも基本的な態度が認められるが、同じ頁で青木は、「野宿の背景と中身の多様性をできるだけ豊かに取り出す道を確保しておきたい」[青木 2000:104]という理由から、「野宿という現前の事実」という一点において「野宿者」を定義づけている⁵⁾。だが「ホームレス」と呼ばれる人びとの「生きられた経験 (lived experiences)」に、より強い関心を示す人類学にとって、「野宿者」を「ホームレス」に代わる分析概念として用いることは、かえってこの概念に投影された「現実」を看過することになるように思われる。なぜなら「ホームレス」は、そのように呼ばれる人びとによっても用いられる、「生きた概念」だからであり、彼らの日常的経験を解釈する上で重要な鍵概念だからである [cf. 二文字屋 2011]。

至極当然のことだが、あらゆる概念は言語的拘束を受ける。例えば、英語でいうところの "home" は、一般的に「家庭」や「家庭生活」といった社会学的意味をもち、一方 "house" は「家屋」、「住宅」といった建築学的意味をもつ。その意味で "*homeless people*" とは、単に住居の喪失を意味しているだけではなく、家族や親族との血縁的紐帯をはじめとする、他者と社会関係を築いていく基点となる場の喪失をも意味しているのである [岩田 2000]⁶⁾。しかし日本語の「ホーム」はそうした現在の英語的意味合いを含みつつも、「ホームレス」の「ホーム」に限っては、"house" に近い意味で認識されており、その点で、英語でいうところの "home" とはニュアンスが大きく異なる。つまりこの概念の使用に伴うジレンマとは、英語の意味論的拘束と、日本語の語用論的拘束との間にズレがあるのである。

だが英語による思考型が必ずしも人類社会全体の説明や概念化に適しているわけではないというリーチの問題提起を思い起こせば [リーチ 1974]、「ホームレス」の語源を英語的思考型に求める必要は必ずしもない。したがって「住居を喪失した人びと (つまり、野宿している人びと)」として日本社会で流通している以上、英語から日本語への変換には成功したが、翻訳には失敗した「ホームレス」それ自体が概念として妥当かどうかを問い、定義を試みることもより、この概念を「誰がどのような意味でどのように使用しているのか」と問うことが重要となる。とくに「ホームレス」と呼ばれる人びとを中心な対象とする人類学にとって重要

なのは、「ホームレスであること」の経験とその解釈において、これを分析概念として定置することである。なぜなら、「社会人類学のいかなる〈分析概念〉も、その概念を生成し所有する民族の言語的、文化的知識の特質をぬきにして成立することはできない」[渡邊 1990 : 77] からである。

もちろん概念と現実とは必ずしも一致するものではない。とくに「ホームレス」は、既に様々な社会通念が付与された、手垢のついた概念である。しかしあえてこの概念を用いることで、その文脈において「ホームレス」概念の実体的側面を照射し、ホームレスを取り巻く社会環境と、ホームレスの経験世界を明らかにしていくことが、「ホームレスの人類学的研究」には必要であるように思われる。そのため本稿では、路上生活ないし野宿生活といった客観的側面とともに、自己同一性の一部として「ホームレスであること」を自認する主観的側面の二つを重視し、「ホームレス」を分析概念として用いることとする。

3 調査地概要

愛知県の県庁所在地でもある名古屋市は、東京都と京都府の間にあることから「中京」とも呼ばれる、中部地方の中核都市である。JR 名古屋駅の南側には名古屋中公共職業安定所（通称：中職安）があり、ドヤ街のない「笹島」と呼ばれる寄せ場がある⁷⁾。

現在は大阪・釜ヶ崎や東京・山谷、横浜・寿といった他の寄せ場と同様に、日雇労働者の活気に満ちた雰囲気ではなく、二、三人の手配師が、毎朝歩道で数人の日雇労働者の就労を仲介しているだけである。また簡易宿泊所が軒を連ねるドヤ街がないことから、名古屋市では他市に比べてホームレスが広範囲に散在しており、名古屋市ではとくに若宮大通公園や久屋大通公園、鶴舞公園、中村公園、名城公園、名古屋駅、金山地区周辺、熱田神宮といった都市中心部に、ホームレスが多く居住する（図1）。

2002 年の自立支援法の公布・施行を受けて、「ホームレスの実態を把握するための全国調査」が翌年 2003 年に実施され、全国で確認された 25,296 人のうち、名古屋市では大阪市、東京都 23 区に次ぐ、1,788 人が確認された [厚生労働省 2003]。またこの全国調査は、自立支援法の政策評価のため 2007 年にも行われ、その後 2008 年から 2010 年までに計 3 回の概数調査が行われている。これらの調査によれば、名古屋市のホームレス数は、2007 年に 741 人、2008 年に 608 人、2009 年に 641 人、2010 年に 502 人 [厚生労働省 2007 : 2008 : 2009 : 2010] が確認され、その数は減少傾向にあることが示されている⁸⁾。またこれらの調査では、ホームレス数の減少傾向が指摘されると同時に、ホームレスの高齢化や居住地の変化、野宿期間の長期化が指摘されている。全国調査の調査結果を総じていうな



図1 名古屋市内、とくに中心部におけるホームレスの主な居住地

らば、近年のホームレスの諸相は、一般的なイメージである「単身の中高年男性」に大方合致するものの、野宿生活の長期化とそれによる高齢化が進んでいる。さらにこれに加え、社会運動家の笠井が「ニュー・ホームレス」〔笠井 1995〕と呼んだ、寄せ場という特殊な労働市場を経由していないホームレスが増加しており、特に近年では「派遣切り」などによる失業者のホームレス化が目立つ。名古屋市内に居住するホームレスもまた、こうした状況と大体において合致するといえよう。

II ホームレスと都市

本章では「戦略」の具体的諸相をみていく。とくに自立支援法に基づき策定された名古屋市のホームレス対策と、それに準拠して行われる行政による空間的排除について論じ、ホームレスの居住実践を取り巻く社会環境について明らかにする。

1 名古屋市のホームレス対策

自立支援法の制定を受けて、名古屋市は市内の実情に応じた自立支援の実施計

画を策定することとなり、2004年7月、5年間を計画期間とする「名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画」（以下、「実施計画」とする）〔名古屋市役所 2004〕を策定した。当計画は現在、第2期目として継続中である〔名古屋市役所 2009〕。

しかし名古屋市では、自立支援法の制定に先立ち、2001年に「名古屋市ホームレス援護施策推進本部」が設けられるなど、既にホームレス対策が行われていた。また、2002年秋には白川公園及び若宮大通公園に住むホームレスを入所対象者とした「白川公園前宿泊所」（定員150名、5年間限定の設置のため2007年に廃止）が中村区に、そして「自立支援センターあつた」が熱田区に設置されている。これらは民間社会福祉法人に運営が委託された施設であり、前者は「公園等で起居しているホームレス」を対象に「保護」と「公正」を目的としたものであるのに対し、後者は「就労意欲及び能力を有するホームレス」を対象に「自立」を目的としたものである。さらにこれら両施設に加え、2004年春には名城公園と久屋大通公園に住むホームレスを対象に「名城公園宿泊所」（定員200人、運営期間を2013年まで延長）が、そして中村区に「自立支援センターなかむら」（定員72名）が設置され、現在でも運営されている。

実施計画は現在、こうした施設を活用しつつ、自立支援法に則った支援策を試みているが、そこで目指されているのは、「就労による自立」と「福祉等の援護による自立」である。実施計画はこれらを軸に、「住まいの確保」「雇用の確保」「心身の健康回復」「ホームレスに対する相談・援護」「ホームレスの人権擁護」「地域における生活環境の改善」「国・県・経済団体等との連携及び市民との連携」を実際の取り組みとして提示している〔名古屋市役所 2004〕。

このように見てみると、名古屋市ではホームレス対策が十全に行われているように思われる。しかし主として「就労による自立」が目指されながらも、施設入所期間はいずれも原則6ヶ月と短く、また何よりも就労自体が困難な昨今の経済状況において、「就労による自立」が十分に達成されているとは言い難い。というのも、「自立」に含まれる具体的な就労形態や、自立的生活の基盤が確保されたその後の状況などが正確に把握されておらず、また「自立」の定義が不透明であり、統計データの信憑性は低いからである。実際に、行政の援助を受けたが諸々の理由で路上生活に戻ったホームレスがいることから、「自立」がどこまで達成されたかについて、その不明性は依然として拭い去れない。

2 ホームレス対策の二面性

名古屋市の実施計画に示されたホームレスの自立支援は、「自立」による「社会生活への復帰」を目指すものである。したがって、実施計画では住居や仕事、

健康といった、経済的基盤に由来する基本的な生活基盤を有していないことに、ホームレスが「ホームレス」であることの理由が求められているわけだが、これは逆に言えば、就労を通じた経済的自立による住居の確保こそが、「社会生活への復帰」とみなされているということでもある。

ホームレス対策は基本的に「包摂」と「排除」の二面性をもつ〔北川 2005〕。例えば自立支援の中心的施策である緊急一時宿泊施設（シェルター）と自立支援事業施設では、稼働能力があり、かつ就労による自立の意思があるとされた該当者は「就労による自立」に向けた支援を受けることができるが（＝包摂）、他方、非該当者は支援の対象から外され、入所期間が終わると路上生活へと戻される（＝排除）。また社会学者の妻木が指摘するように、自立支援事業施設への入所を拒否して路上生活を続けるという行為は「社会生活の拒否」⁹⁾とみなされ、矯正ないし排除の対象となる〔妻木 2003〕。つまり「保護」や「支援」に対して路上生活を続けるという選択は「非合理的」として、市民社会からの「逸脱」とみなされるのである。そして「社会生活を拒否する者」、すなわち自立支援を受けずに路上生活を続けるホームレスは、「追い出し」の対象として空間的排除を受けることとなる。「追い出し」とは、「路上」に設置されたテントや小屋を撤去してホームレスを空間的に排除することであり、行政代執行による強制撤去などもこれに含まれる¹⁰⁾。

「追い出し」が拠り所とするのは、「都市公園その他の公共の用に供する施設を管理する者は、当該施設をホームレスが起居の場所とすることによりその適正が妨げられているときは、（中略）法令の規定に基づき、当該施設の適正な利用を確保するために必要な措置をとるものとする」という自立支援法の第十一条である〔厚生労働省 2002〕。「他に住むところがない」とは極端な物言いではあるが、しかしホームレスにとって住むことのできる場所が「路上」である以上、「追い出し」は何よりもまず生存の危機を意味する。

では「追い出し」は如何なる論理を以てして行われるのだろうか。ここでは2008年2月25日に、名古屋市でも一際ホームレスが多く居住する若宮大通公園での緑政土木局緑地管理課と中土木事務所（以下、両者をあえて区別せずに「緑政土木局」とする）による「追い出し」を事例に見ていきたい（写真1）。

2008年1月31日、緑政土木局は若宮大通公園に住むホームレスらに対し「2月半ばに植栽工事をすると通知し、2月18日には突然、「25日に南側の植樹帯の植栽工事をすると具体的な日時と工事場所を通知した。通知の方法は、工事の対象区画にあるホームレスのテントや荷物に貼り紙をするというものである。当事者と支援者はこれを「追い出し」であるとしてすぐさま反応し、工事予定日である25日に若宮大通公園に集まり、抗議活動を行った。

抗議に対して緑政土木局は、植栽工事は行政事業の一環であり、またその目的は「公共施設や公共空間の利用適正化と美化」であるとして施工の正当性を強調し、「そもそも公共空間である公園内に私物を置き、テントを設置することは不当である」と最後に付け加えた。そしてこれに対し抗議の声が上がると、すぐさま、「だから行政側としては、シェルターや自立支援センターを設置し、みなさまに入所を勧めている」と、行政のホームレス対策が整備されていることを強調した。その後数十分にわたる抗議の末、「植栽工事」と称した「追い出し」は当面中止となり、まずはそこに居住するホームレスと今後の予定について十分な話し合いをもつということで、緑政土木局側が妥協するに至った。そもそも支援者らが植栽工事を「追い出し」であるとみなした根拠は、工事の対象区画がホームレスのテントや荷物がある場所と丁度重なる、局所的なものであったからである。

「公園の利用適正化と美化」と称した緑政土木局による「追い出し」は、空間的排除のもっとも顕著なひとつの現れであり、とくにそれを支えているのが、(主に就労による)「自立」や「保護」といった支配的な価値観である。だがこうした価値観は同時に、「非自立」と「非保護」を必然的に生み出し、「自立」ないし「保護」に相応しい者とそうでない者との選別を前提としている。そのため支援を受けずに路上生活を続けることは「社会生活の拒否」とみなされ、そのようなホームレスは、「追い出し」の主要な対象となるのである¹¹⁾。

「追い出し」は自立支援法第十一条によってその正当性を担保されている。だが実際には、それが明確な形で提示されることはない。「追い出し」ではなく、あくまで「公園の利用適正化と美化」と緑政土木局が言い張るのは、「追い出し」という空間的排除が「人権」に関わる問題事項だからである。つまり「人権」に関わるのはもっぱら健康福祉局であり、緑政土木局の業務の性格上、「人権」を考慮するならば健康福祉局を含めた三者間(ホームレス／支援者・緑政土木局・健康福祉局)の問題となる。だが緑政土木局にとってこうした事態は歓迎されない。縦割り式の行政組織とその制度上、ある事業に関わる行政組織を限定することで、業務遂行が容易になるからである。

そこで緑政土木局が持ち出すのが、「就労による自立」という支配的な価値観に依拠した、「シェルター」や「自立支援センター」への入所である。とくにこうした施設入所への勧誘は、「行政はホームレスに対して無関心ではなく、適切な対応策を用意している」ということを含意している。しかし既に指摘したように、行政側が用意する対応策はあくまで限定的な「社会的自立」を目指したものであり、とくに「包摂」と「排除」の二面性をもつ対応策は、ホームレスたちの「希望」に沿うものでは必ずしもない。

事例でみた「追い出し」は、支援団体らの働きかけもあって、当面のところ見



写真1 若宮大通公園での「追い出し」に対する抗議
(2008年2月25日、筆者撮影)



写真2 「追い出し」後に設置されたバリケード

送られたものの、しかし「植栽工事」といった公的事業の名目の下に、「路上」から退去させられたホームレスは多い。居住空間を失ったホームレスは、新たな居住地を求めて移動するか、行政の用意した施設に入所し、「自立」の機会を窺いつつも、「その場しのぎ」の生活を送ることとなり、「自立支援不適応者」と見なされれば、再び「路上」へ戻されることとなる。しかし「追い出し」後には、今後新たにホームレスが住めぬよう、「小屋がけ禁止」と書かれた看板が張られてバリケードが設置され、もはや居住に適した場所はそこにはない（写真2）。

3 ホームレスの不可視化

名古屋市のホームレス数は、2003年に行われた全国調査で1,788人と発表されたが、その後の概数調査では年々数が減り、2010年の全国調査では、三分の一ほどの502人であった〔厚生労働省 2010〕。しかし統計上は「減少」しているものの、それは「見える」ホームレスの数が減ったということに過ぎない¹²⁾。つまり先にみた「公共空間の適正化と美化」と称した「追い出し」をはじめとする排除の結果、「見える」ホームレスは減少したが、その一方で、「見えない」ホームレスは増加しているのである。

「見えない」とは、文字通り、「視覚的に認識することができない」ということである。したがって『「見えない」ホームレスが増加した』とは、都市住民にとってはその存在を認識することができないが、それはホームレスが減少したのではなく、不可視化したということであり、従来とは異なる形で都市空間に存在しているということを意味している。

都市で生活している者なら誰でも、経験的に知っているように、「ホームレス」とはまずもって視覚的に認識される存在である。それは「ホームレス」というカテゴリーが、視覚的な諸記号と結び付けられて認識されているからに他ならない。視覚的記号とは、具体的にいえば、公園の端にあるブルーシートや地下道に組み立てられたダンボール、アルミ缶を山のように積んだ自転車やリヤカー、無造作に伸びた髭や汚れた衣服といったものである。そしてこれらは「不自然なもの」として、またホームレスに「特有のもの」として解釈される。このことを裏付けるように、事実、先の全国調査でのホームレス数の調査方法は目視調査であり、また自立支援法では視覚的に把握することができる情報に拠って「ホームレス」が定義されている。

だがこうした視覚的諸記号をもったホームレスが、今日、不可視化している。それは先の「追い出し」に大きく起因しているが、それが意味するところは、居住地の周辺化、居住形態の簡易化ないし流動化である¹³⁾。つまり「追い出し」という空間的排除によって、都市中心部に新たな小屋やテントを常設することが

難しくなった結果、居住地を都市周辺部へと移動するか、あるいは居住形態を、随時携帯可能なダンボールなどに簡易化し、かつ居住地を頻繁に変えるかという二者択一を迫られ、ホームレスが不可視化したのである。前者の場合、地理的に遠く隔たるため、当然都市中心部では不可視となり、一方後者の場合、地理的には近隣にありながらもその存在が視覚的に把握しきれないために不可視となる。したがって、全国調査に示された「ホームレスの減少傾向」の背景には、都市周辺部での「見える」ホームレスの増加と、都市中心部での「見えない」ホームレスの増加がある。ではこうした近年の動向を踏まえつつ、ホームレスの居住実践をどのように捉えることができるだろうか。次章でその具体的諸相を明らかにし、考察したい。

なお、本稿で取り上げる事例はすべて名古屋市の中心部（中区、東区、昭和区）でのフィールド調査によるものであり、周辺部（例えば天白区や名東区など）におけるホームレスの居住実践を扱うものではないことは予め留意されたい。また本稿では便宜上、都市中心部におけるホームレスの居住形態を、「見える」ホームレスに代表される定住型と、「見えない」ホームレスに代表される移動型の二つに大別し、半移動型（ないし半定住型）をその中間にある居住形態とする。これら居住形態の分類はあくまで相対的なものだが、この場合、定住型とは、公園や河川敷、高架下などにテントや小屋を常設するもので、基本的には一年を通じて春夏秋冬の気候に耐えうるベニヤ板やトタン板、ブルーシートといった材料が、



写真3 定住型の小屋の例



写真4 移動型のテントの例



写真5 地下街へ続く階段に座り、就寝時間を待つホームレス

小屋の建材として使われる（写真3）。また、移動型とは、定住型のようにある特定の場所に恒常的な居住空間をもたず、可搬性が高く、また入手が簡単なブルーシートやダンボール、新聞紙を用いて、寝所を設置するものである（写真4）。とくに特定の住居をもたない移動型のホームレスの場合、就寝時にだけ特定の空間を一時的に占有するに過ぎず、一日の大半は市立図書館や公園、駅構内といった場所で時間を過ごすことが多い（写真5）。そして半移動型は、定住型ほど構造的に堅固な小屋を持たないが、移動型ほど頻繁に寝所を変えることはないため、特定の居住空間を持ちつつも、定住型よりも居住地を変えることの多い居住形態である。

Ⅲ 都市に住まう

本章では「戦術」の具体的諸相についてみていく。とくにここでは三つの異なる居住形態を、ホームレスの居住実践の事例として提示し、「戦略」の圏域である「路上」における居住実践の考察を試みる。

1 空間に住まう——定住型

ホームレス アウトドア派と 空威張り 作：沢野健草

[ビッグイシュー日本編集部（編）2010：112]

筆者は2007年8月、名古屋城外堀公園にある小屋を間借りし調査を行っていた。その小屋は生活保護適用により出て行った（元）ホームレスのものであったが、そこを使用する許可をくれたのが、すぐ隣に小屋をもつ本田さん（仮名、当時49歳）である。

本田さんの小屋は、2005年に建てられた後、約3年の月日を経て二つの部屋が増築された、気密性が高く温度調整のしやすいツーバーフォー工法によって建てられた3DKの小屋であった。ある支援者の協力の下、車で廃材を集め、コンクリート・ブロックを基礎にしてプレハブの建材を使って骨組みを作り、外壁をベニヤ板とトタン板で囲っている。すぐ脇に立つ木のせいで、本田さんの小屋は一見するとその奥行きが分かりづらいが、実際中に入ってみると、天井はやや低いものの、奥行きのある空間が広がっている。当初リビング兼キッチンと寝しかなかった小屋は、その後、知り合いのホームレスや支援者が訪れたときに、彼らをいつでも招くことができるよう、談話スペースを設けることとなり、拡張された。

鍵付きのドアを開けると畳敷きのリビング兼キッチン（約四畳半）、その奥に一段高く作られた寝室（約四畳）があり、漫画本やビデオが積まれている。またリビング兼キッチンには、多種類の調味料や鍋、フライパン、まな板などの調理器具が備えられており、手洗いや調理の際に用いる水が、2.5ℓのペットボトル数本に常にストックされている。また、車の使用済みバッテリーにインバーター（電力変換装置）をつけて電力を確保し、卓上ライトや扇風機、テレビなどを動かしていた。だが冷蔵庫は電力を大量に消費するため、冷却ボックスに氷を買ってきては入れ、ビールやキムチ、肉などを保存する。用を足す時は公園内に設置された公共トイレを使用し、生活を支える水は公園の水道から調達する。また冬場は銭湯を利用するが、夏場は公園の水道を使って、拾ってきたホースにシャワーの頭を付けて即席シャワーを作る。

本田さんが名古屋城外堀に小屋を建てたのは、5年前であるが、それ以前は中村公園にテントを張って住んでいた。移り住んだ理由は、近隣住民と揉め事があったこと、そして行政からの「嫌がらせ」があったことによる。「嫌がらせ」とは、公園巡回中の行政職員が「ここに住んではいけない」や「近隣住民の邪魔になる」といった発言を執拗に続けるといった類のものである。そこで「生活を邪魔されたくない」と本田さんが次なる居住地として選んだのが、名古屋城外堀であった。木々が多く、すぐ後ろは雑草が生い茂った堀があり、そこに年中水が溜まっているせいか、夏は蟬が鳴き、蚊に悩まされる。しかし名古屋高速都心環状線の下を走る外堀通りがすぐ目の前を通るその場所は、車の通行量が多く騒がしいが、歩行者は非常に少なく、行政の監視の目が他の場所に比べて厳しくなかったため、本田さんの次なる居住地となった。

だが手の込んだ本田さんの小屋も、2008年には行政によって取り壊されることとなった。その理由は、名古屋城の観光化推進による「公園の利用適正化と美化」である。というのも、名古屋城外堀には、都市中心部には珍しく蜚が生息している。そこで行政側は、観光客誘致のために外堀周辺を整備し直し、これを機に、本田さんをはじめとする名古屋城外堀公園に住むホームレスたちを一斉に追い出そうとしたのであった。ホームレスであると同時に支援者でもあった本田さんは、「自分のことより『ナカマ』¹⁴⁾のこと」といって、全員が何らかの「保護」を受けることができるよう行政側と交渉し、全員が去った後、自らも生活保護を受け、目に涙を浮かべながら小屋を捨てた。

2 時間に住まう——移動型

ダンボール 3分過てば 我が家かな 作：麴好司

[ビッグイシュー日本編集部（編）2010：77]

2007年8月、九州・長崎出身の山口さん（仮名、63歳）が寝所としていたのは栄地区付近の地下街である。寝所は主に地下街に軒を連ねる商店の前だが、開店前の朝6時半～7時には起き、荷物を整理して地下街を出る。就寝時には店が完全に閉まり、辺りが静かになる11時ごろにダンボールと寝袋を持って地下街に入る。ダンボールは近くのスーパーから貰ってきたもので、寝袋はある団地のゴミ置き場から拾ってきたものである。

山口さんが就寝する時間帯にいるのは、地下街を通過して駅に向かう酔っ払いや、同じく地下街を寝所とする他のホームレスぐらいである。しかし以前は住みやすかったその場所も、2007年当時は警備員から注意を受けて追い出されるなど、寝所を確保するのに苦勞するようになった。また、時折酔った都市住民から誹謗中傷を受けることもあり、ひどい時にはゴミを投げつけられることもある。そこで山口さんは、なるべく人気のない場所を探し、完全な静寂に包まれる深夜まで読書に耽る。だが寝所は毎回同じではない。基本的には地下街が山口さんの寝所であるが、熟睡したいときには人気の少ない公園や、路地裏などを寝所とする。しかしまた、寝所は天候や季節によって臨機応変に決定される。

調査時の数ヶ月前、山口さんは中区にある白川公園付近で定住型の生活をしていたが、冬場は地下街の方が「暖かい」ことを地下街に寝る知り合いのホームレスに教えてもらい、移動型へと居住形態を変えた。夏場は公園のベンチで寝たこともあったが、数年前から、ベンチに手すりが付けれられ、横たわることができないようになった。一方冬場は暖かい寝所が必要になる。時折暖房の排気口近くに寝所を構えるが、しかし熱風に長時間晒されていると、朝には喉が渇き、疲労が溜まる。そこで、主に地下街に寝所を構えるようになった。廃品回収などで日銭を稼いだときには、暖房の効いた24時間営業のファーストフード店で一杯のコーヒーを片手に眠りにつき、また財布に余裕があるときには、6時間1000円の深夜パックを利用して漫画喫茶でシャワーを浴び、就寝する。またある時は大型スーパーなどに設置されている多目的トイレを利用して、タオルを濡らして体を拭き、歯磨き、髭剃り、洗濯などをする。こうした場所を利用するのは、「誰にも迷惑かけないし、誰も俺のことを気にする人はいない」からである。

夕食を済ませると、顔見知りのホームレスを訪ねて酒を飲み、夜が深まると、いつも荷物置き場にしている歩道沿いの植木に隠したダンボールと生活用品が

入ったカバンを取り出し、地下街に向かう。近くで寝ているホームレスと挨拶を交わし、ダンボールを敷布団のように広げ、カバンを枕にして新聞紙を布団代わり掛ける。だが、眠りは浅い。都市住民からの嫌がらせが怖いからである。罵声に加え、空き缶やタバコを投げつけられ、ひどい時には石や自転車が地上の入り口から投げ入れられる。今でも腕や足に残る傷はそうしてできたものである。そのため山口さんは地下へと続く階段の踊り場ではなく、地下鉄駅構内や地下街の商店前などに寝所を確保するようになった。ただ、どこでも寝ることができるわけではない。ある種の「なわばり」があり、知らずに寝ていると「そこは俺の場所だ」といわれ、揉めることもある。そのため山口さんは移動型へと居住形態をシフトしてから、より周囲の環境に気を配るようになった。

山口さんの一日の移動距離は長く、また季節や天候、その時の社会環境によって寝所を頻繁に変える。実際、筆者は山口さんの就寝時間を狙って山口さんを探そうとするが、毎回小一時間ほど栄地区付近を歩かなければ山口さんに会うことはできなかった。そこで筆者は、「明日の×時に〇〇で会う」という約束を取り付けようとするが、「明日はどこに行くか分からんよ。たぶん〇〇におるけど、それも微妙やな」といった曖昧な答えしか得ることができなかった。当初、筆者はそのような答えを、山口さんの放浪癖ゆえのものであると考えていたが、しかし実際はそれだけではないことに気づかされた。それはある日の深夜、ダンボールと寝袋をもって昨夜と同じ寝所に向かう山口さんに同行したところ、地下街の入り口で警備員を見かけ、山口さんは「ここはあかん」といってすぐ別の場所に向かったという、ある出来事にある。筆者が「警備員がどこかいくまで待ってればいいんじゃないの」と聞くと、「いや、せっかく寝たのに叩き起こされたらたまらん。ここは今日はあかん。別の場所にする」と山口さんは答えた。そして別の寝所に着くと、「わしはな、誰にも干渉されたくないのよ。人様に迷惑かけたくないってのもあるが、自分も迷惑をかけられたくない。迷惑がられたら終わりや。わしが警備員に注意されて、同じところで寝ている他のホームレスも追い出されたら大変やろ。それがここで上手く生きていくこと。わしらの礼儀作法っていうやつよ」と語った。

3 時空間に住まう——半移動型

アルミカン 捜し求めて 三千里 作：沢野健草

[ビッグイシュー日本編集部(編) 2010: 103]

富田さん(仮名、当時49歳)の居住形態は、半移動型(ないし半定住型)である。

2007年当時、富田さんの居住地は広小路通りのY橋の下であったが、2008年に筆者が再び訪れた際に富田さんの姿はすでになく、2009年に偶然再会した時には、名古屋市内のある小さな公園に移り住んでいた。

富田さんは主に廃品回収で収入を得ているため、完全な移動型は適さない。なぜなら、集めた空き缶などを貯め置きし、盗まれないよう、常に身近に置いておかなければならないからである。小屋を立てるスペースのないY橋の下では、橋そのものが屋根の代わりになるため、廃品回収の際に拾ってきたマットと布団を敷き、ガスコンロと100円ショップで購入したガスカセットで簡単な調理場を作っていた。また、富田さんには一緒に住むナカマが二人おり、互いの土地勘や、炊き出しなどで知り合ったホームレスから聞き出した情報などから廃品回収のルートを決定し、また廃品物の買取レートの情報をいち早く共有するなど、効率良く、日銭を稼いでいる。

Y橋の下に住む前は白川公園に住んでいたが、行政による見回りや周辺地域での「追い出し」が多発したことを受け、居住地を変えた。白川公園に住んでいた時は、他にナカマが一人いたが、そのナカマが廃品回収で得た富田さんの取り分を盗ろうとして揉めあいになり、縁を切って、他の二人とともに新たな居住地へと移ったという。そこは前々から目を付けていた場所で、廃品回収の最中にたまたま発見したところであった。

そして白川公園とY橋を経て、また別の公園に移動したのは、Y橋の近くにある「屑屋」(アルミや銅などを買い取る廃品回収業者)が、アルミや銅線の買い取り価格を大幅に下げたことによる¹⁵⁾。そこで、炊き出しで知り合ったあるホームレスに、「〇〇にある屑屋が90円台で買い取ってくれる」と聞き、現在の居住地に移り住むことを決心したという。そしてナカマと相談し、移動に不便なマットなどは捨て、ダンボールとブルーシートで公園の片隅に小さな寝所を作った。しかしそこもまた、行政の見回りが厳しくなり、近々また別の場所へ移動するつもりだという。いつ移り住むかは分からないが、少なくともナカマの一人は60歳を過ぎたため、冬場は名古屋市が用意したシェルターなどの施設に入る予定である。「どうせ半年後には出なきゃならねえだろ。だったらもう年なんだから、ぬくい(暖かい)とこで年末年始を過ごさなきゃな」と話す。

ホームレスを取り巻く社会環境の変化は目まぐるしい。したがって、一年を通じて一つの居住地を構えることがない富田さんは、ナカマとの話し合いを経て、新たな居住地を決定する。そのため、ナカマ同士での情報交換や、炊き出しで出会う他のホームレスからの情報は、居住地の決定にとって非常に重要なものとなる。

4 考察——都市の「隙間」に住まう

ホームレスの居住実践を取り巻く環境の最も基本的な特徴は、そこが「他者の場所」であるということである。「路上」とはまさにこの「他者の場所」に他ならず、ゆえにホームレスの居住実践は「不法占拠」とみなされる。

ド・セルトーが、「ある意志と権力の主体（企業、軍隊、都市、学術制度など）が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（または操作）」[ド・セルトー 1987:100]と定義する「戦略」は、まさにこうした場所において力を発揮する「もののやりかた」である¹⁶⁾。それは内部と外部を明確に境界づけると同時に、その境界線を維持するために異質なものを管理・監視しようとする。ホームレスが居住する「路上」とは、まさにこうした「戦略」の圏域であり、その意味で、ホームレスの居住実践は、常に「戦略」との力関係に左右されているといえる。

本稿では便宜上、ホームレスの居住形態を、定住型、移動型、半移動型（ないし半定住型）の三つに区分し、事例を通じてその具体的様相を見てきた。だが三つの居住形態はいずれも都市的空間を占有するという点で共通するが、すべての事例に見られたように、いつかは現時点での居住地を捨てなければならない、居住形態を区別しうるのは相対的な居住期間に過ぎない。したがってここで問われなければならないのは、こうした居住形態の違いに起因する居住実践であり、「これといってなにか自分に固有のものがあるわけでもなく、したがって相手の全体を見おさめ、自分と区別できるような境界線があるわけもないのに、計算をはかること」[ド・セルトー 1987:26]と、ド・セルトーが定義した「戦術」である。そこで本節では、「戦略」の圏域である「路上」における「戦術」としての居住実践に照準を合わせ、考察を試みたい。

あらゆる居住実践は、居住地を選定することから始まるが、小屋やテント、寝所を構えるスペースがあれば良いというわけではない。なぜなら居住地の選定要件は、生活上の安全性や利便性に大きく拠っているからである。その上でホームレスは、居住に適した都市的空間を探すことになるが、ここに、ホームレスの居住実践の最も顕著な特徴を見出すことができる。

「路上」は戦略的主体の支配空間である。しかし、「路上」はどこかしこも均質的な支配空間ではない。それまで大した関心を払われなかった名古屋城外堀公園が、2008年には突如「追い出し」の対象となったように、時間と場所によって、「路上」には常に管理・監視の程度に濃淡があるのである。したがって、居住に適した都市的空間とは、「戦略」の効力が相対的に薄弱な空間をいう。ホームレスの居住実践とは、こうした都市的空間を覆う「戦略」の強弱を正確に読み取ることによって成立しているのである。常に空間的排除から潜在的な危機を抱えながらも、都市に住まうことができるのは、こうしたことによる。

さて、規律社会から管理社会への移行における「管理領域の全域化」という事態において、時間地理学的パースペクティブから空間の変容を論じた加藤は、管理領域と管理領域に介在する「隙間」の存在を指摘しているが[加藤 2009]、「路上」とはこの「隙間」に他ならない¹⁷⁾。確かに、「管理領域の全域化」という事態は、一見すると、公共空間に代表される「隙間」を消滅させていくかのように見える。しかし、潜在的にはあるにしても、諸領域の間には未だ「隙間」があり、ホームレスにとって都市的空間は、依然として居住可能性の余地を残しているのである。なぜなら戦略的主体である「行政」は抽象的な主体であるに過ぎず、実際の管理と監視は、「行政職員」という具体的な主体によって担われているからである¹⁸⁾。

ところで、生活上の安全性や利便性といった居住地の選定要件や、都市的空間における「戦略」の力の強弱を読み取ることは、必ずしも同じような居住実践として「路上」に立ち現れるわけではない。本稿で区別したそれぞれの居住形態はまったく異なる居住実践を生み出すのである。例えば、名古屋城外堀公園に住んでいた本田さんは物質的に強固な居住空間を作っていたのに対し、地下街に住んでいた山口さんは、ダンボールと寝袋といった非常に簡素な居住空間を作っていた。さらにY橋から公園へと移り住んでいた富田さんは、本田さんと同じとは言わないまでも、腰を据えるに十分な居住空間を作っていたが、たびたび居住地を変えるため、すぐに放棄できるような居住空間を作っていた。このように、三人とも、居住地の第一義的な選定要件が安全性や利便性の確保にあったにもかかわらず、その居住形態の違いから、まったく異なる居住実践を行っているのである。そしてこうした相違点、とくに定住型と移動型の相違点から、ある結論を引き出すことができるだろう。つまり、定住型が長期間を通じてある特定の都市的空間に住まうのとは異なり、移動型は都市的時間の「隙間」に住まうということである。

都市は昼と夜ではまったく異なる顔を見せる。日が昇るとともに大勢の都市住民があらゆる交通機関を利用して動き出し、歩行者の途切れることのない日中を経て、日が沈むと再び多くの都市住民が帰路につく。一方、都市的空間が都市住民に埋め尽くされる日中とは対照的に、深夜を過ぎると都市はネオンの光を灯し、静寂に包まれる。移動型のホームレスが「路上」に現れるのはまさにこの時間帯であり、それは都市住民の所有する都市的時間とは対照をなす。

言うまでもなく、近年の新しい動向である「見えないホームレスの増加」とは、こうした移動型のホームレスの増加にある。したがって、全国調査の調査結果に拠りながら行政が謳う「ホームレスの減少」とは、あくまで都市住民が視覚的に認識できる点においてのみ、そのように言うことができるに過ぎない。太陽光に

照らされた都市的時間の「裏側 (= 「隙間」)」に、ホームレスはなお、都市に存在しているのである。

IV 結語

本稿は、名古屋市での実地調査をもとに、ホームレスの居住実践について考察した。とくに本稿が焦点化したのは、空間的排除という潜在的危機に常に晒されながらも「路上」に住まう、ホームレスの居住実践である。そして本稿を通じて明らかになったのは、ホームレスにとって「住まう」ことが、必然的に都市的空間の占有ないし私有を意味するものの、それは「路上」という管理領域の「隙間」、すなわち「戦略」の効力が相対的に薄弱な空間において成立しているということである。しかしまた、居住形態の違いから、ホームレスは都市的空間の「隙間」に住まうと同時に、都市的時間の「隙間」に住まうことが明らかとなった。それは、「ホームレスの減少」が謳われるなかで、「『見えない』ホームレスの増加」という逆説的な現象を背景とした、新たな居住実践である。

とりわけこの移動型の居住実践に、都市的空間と都市的時間それぞれの「隙間」の存在をもっとも顕著に読み取ることができる。なぜなら特定の生活空間を持たない移動型のホームレスにとって、都市に住まうとは、都市の「隙間」を生きることとほぼ同義だからである。身体が物質的である以上、「住まう」とは都市的空間を占有することであるが、これに加え移動型は、時間を通じてまったく異なる様相を呈する都市的時間的「隙間」に住まう。しかしながら、都市の社会環境は常に可変的であるため、「隙間」は一定ではない。「隙間」を生きるためには、常に都市を移動し続けなければならないのである。その意味で、「固有の場所」をもたないホームレスの「住まう」とは、本質的に「移動」を前提とした居住実践であるといえる。

ホームレスにとって、「住まう」ことのもっとも根本的な意味は「生活する」ことであるが、その生活は様々な人間関係によって補填されている。「路上」を基点とした社会関係が、ホームレスの生活実践を大きく支えているのである。しかし単に住まうだけでは、そのような関係性が生まれることはない。なぜならホームレスたちは「路上」という生活環境において共通性をもつに過ぎず、共通性と共同性は必ずしも一致するものではないからである。したがって、ロサンゼルスにおけるホームレスの移動パターンとその経路を辿ることでホームレスの社会的ネットワークを明らかにした地理学者のウォルチと人類学者のロウの研究が示唆するように、ホームレスが他者と取り結ぶ社会関係は日常的な移動の所産であり、移動を契機とした社会関係にこそ、ホームレスの共同性が立ち現われるのである。

[Wolch and Rowe 1992] ¹⁹⁾。

概してホームレスの間で使われる「ナカマ」とは、基本的に、そのような日常的な移動を通じて取り結ばれた社会関係を指し示す。しかしこれは境界づけられた共同性を有しない。むしろそれは、「非同一性による共同性」[大杉 2001]に根ざした「共同体」[小田 2004] ²⁰⁾である。そしてそれを持続可能なものとするものこそ、「居住」を基点に営まれる社会生活に他ならない。本来一切の社会的紐帯をもたず、個別的なバックグラウンドをもつホームレスたちは、「移動」を通じて「ナカマ」を構成し、「居住」を通じて社会生活を構成する。それはまさに、「非一場所」である「路上」を「場所」化していく実践であり [cf. オジェ 2002] ²¹⁾、そこに本稿では十全に論じることのできなかつた、「ホームレス」と呼ばれる人びとの「生きられた経験」を捕捉する更なる手掛かりを見出すことができるように思われる。

謝辞

事例で取り上げた本田さん、山口さん、富田さんをはじめ、名古屋市内で出会った「ホームレス」と呼ばれている方々には多大なる調査協力を戴きました。また本稿執筆にあたり、査読者の方々から多くの貴重なご助言を戴きました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 本稿では記述の便宜上、概念それ自体を指す場合には括弧付きの「ホームレス」を、「ホームレス」と呼ばれる人びとを指す場合には括弧無しのホームレスをそれぞれ用いる。
- 2) 「ホームレスの増加」という「新たな」動向を受けて、東京都は1995年7月に『新たな都市問題と対応の方向―「路上生活」をめぐる』[東京都企画審議室 1995]という報告書を提出した。そこで具体的に想定されていたのは、当時の新宿駅西口に軒を連ねていたダンボール・ハウスに住む人びとであり、東京都はこうした路上生活者の存在を「新しい問題」として社会問題を構成した。しかし、「新しい」とは路上生活者の数的増加だけを指していたわけではなく、従来一般的であった「寄せ場」を経由したホームレス化という道筋を辿らずにホームレス化した人びとが、当時の調査で全体の約四割ほどいたことが、「新しい」理由の一つでもあった。
- 3) このような問いが意味をもつのは、「ホームレス」と一般的に呼ばれる人びとの居住実践が、「排除」という外発的な力学に対する「反応(responses)」であると考えられるからである。なお、ここで「反応」としたのは、それが必ずしも「抵抗」を意味しているわけではないからである。例えばアリゾナ州・ツーソン(Tucson, Arizona)で調査をした社会学者のスノウとマルケイは、行政からの空間的排除に対するホームレスの生存戦略として、退去(exit) 適応(adaptation)、固執(persistence)、意思表明(voice)の四つタイプを挙げているが[Snow and Mulcahy 2001:165]、このうち前者二つのタイプは、排除に対する「抵抗」と言えるものではない。
- 4) 「固有の場所」とは物質的な空間を指しているわけではなく、より抽象的な場を指している。それは自らの権力を保持し、その行使を可能とする、戦略的主体のみに与えられた社会的・政治的領域である。したがって、「固有の場所」を確保するための「空間の分節は、ある一定の場所からの一望監視という実践を可能にし、そこから投げかける視線は、自分と異質な諸力を観察し、測定し、コントロールし、したがって自分の視界のなかに『おさめ』うる対象に変えることができる」[ド・セル

トー 1987: 101]。

- 5) また社会学的研究が「野宿者」を用いるのは、「ホームレス」という社会問題カテゴリーに、政治的なイデオロギーを読み取るからである。社会学者の中根の指摘するところによれば、東京都が「新しい問題」として「ホームレス」を構成した背景には、寄せ場が抱える問題性を顕在化させないための、つまり治安管理を補完するものに過ぎなかった従来の寄せ場（山谷）対策の「問題性の隠蔽」という思惑があった【中根 1998: 1999】。
- 6) *The Oxford English Dictionary* によれば、“home”は元々「住居 (abode)」や「居住場所 (dwelling-place)」といった建造物的な意味合いが強かったが、その後、愛着や満足感といった情緒的・心理的な側面が強調され、「故郷」などを示す言葉になった【Simpton and Winer (eds.) 1989: 322-325】。
- 7) 笹島は戦前、スラム化した木賃宿が密集し、多くの日雇労働者が居住する「水車地区」と呼ばれた地区の一部にあたる。水車地区が形成された背景には、国鉄武豊線の敷設工事(1886年完成)があった。つまり 1870 年代末、敷設工事に伴って多くの労働者がこの地区一帯に集住し、ドヤ街（簡易安宿街）が軒を連ねたのである。したがって水車地区は名古屋駅とほぼ重なる。だが、水車地区は戦災によって焼失し、その後再びドヤ街が形成されたものの、オイルショック以後の寄せ場の弱体化とともに、ドヤ街は解体され、現在その姿はない【田巻 1999a: cf. 藤井・田巻 2003: 82-112】。なお、60 年代から 70 年代の笹島をめぐる名古屋市行政施策の動向と論理については、田巻の論文【田巻 1999b】を参照されたい。
- 8) しかしながら、全国調査の調査手法とホームレス数の調査方法にはいくつかの問題点があるため、データの信憑性は低く、一概に「減少した」と結論付けることはできない。その問題点とは、1) 目視調査であること、2) 多くのホームレスが寒さを回避するために緊急一時宿泊施設（シェルター）や自立支援事業施設、漫画喫茶といった屋内に寝所を確保する 1 月に調査が行われたこと、3) ホームレスが最も不在となりやすい日中に調査が行われたこと、の三つである。
- 9) 実際に、1999 年 5 月に開かれた政府と五都市六自治体からなる「ホームレス問題連絡会議」では、自立支援の対象となるホームレスを「就労による自立」と「福祉等の援護による自立」の二つのタイプに分け、自立を拒否するホームレスを「社会生活を拒否する者」として分類していた。
- 10) 本稿では主に行政による空間的排除を「追い出し」としているが、しかし広い意味で、「追い出し」とは、行政による空間的排除のみを指すわけではない。例えば、オフィス・ビルの管理者が、ビルの入り口で寝るホームレスを排除するために、「オブジェ」と称した建造物（障害物）を設置するなど、この「追い出し」に含まれる。
- 11) 「追い出し」が顕著に行われ始めたのは、「自立」や「保護」の価値観を広く浸透させることとなった自立支援法以後のことである。しかしながら、筆者の記憶では、名古屋市で「追い出し」が起り始めたのは、自立支援法の制定に先立つ、2002 年ごろからである。とくに「白川公園前宿泊所」と「自立支援センターあつた」が設置されてから、行政による「追い出し」が多発した。支援者やホームレスたちの話によれば、名古屋市が自立支援法に先立ってシェルターや自立支援センターを設置し、「追い出し」を開始した背景には、2005 年に愛知県で開催された愛知万博があったという。つまり、愛知県の県庁所在地でもある名古屋市は、国内外からくる観光客の目にホームレスが映らぬよう、市内からその存在の痕跡を消すために、「追い出し」を通じて施設に収容しようとしたのである。
- 12) 確かに近年、生活保護適用が以前に比べ容易になったことから、路上生活をしていた人びとが脱ホームレス化し、その意味で減少傾向にあるともいえる。だがトヨタの企業城下町である豊田市から数十キロメートルほどの距離にある名古屋市では、ここ数年、とりわけ 2008 年の冬に大きな社会問題となった、所謂「派遣切り」によりホームレス化する人びとが増加しているため、「単身の中高年男性」という一般的な「ホームレス」像は瓦解してきている。
- 13) 全国調査をもとに名古屋市が独自に集計した調査結果にも、ホームレスの居住場所と居住形態の変化を読み取ることができる。2007 年の調査では、2003 年の調査に比べ、主な居住場所であった「公

園」で居住するホームレスは大幅に減少し（707%→41.1%）、逆に「河川敷」で居住するホームレスが増加した（6.3%→27%）。また居住形態として「常設小屋（テント）」を持っていると答えたホームレスが大きく減少し（71.3%→48.4%）、逆に敷物やダンボールでの簡易居住者が増加した（26.7%→40.3%）〔名古屋市役所 2009：20〕。

- 14) 「ナカマ」とは、関係性の緩やかな、また流動性の高いホームレスの集まりである。また共同生活を送っていかなくとも、親しい間柄をこのように称することがあり、社会運動体においてこれは、「同じ境遇に生きる者」という広い意味合いをもつ。したがって、この言葉が指し示す範疇は、発話者によって大きく異なる。
- 15) 2007年8月当時、アルミ1キログラムあたり160円前後であったが、2009年には約半額の80円台となった。現在でもあまり大差はない。なお、廃品買取価格はグローバルな市場価格によって頻繁に変動するが、2007年当時が高値だった背景には、2008年8月に開催された北京オリンピックへむけた建設ラッシュがあった。
- 16) ド・セルトーも明確に述べているように、「戦略」が前提としているのは、内部と外部を境界づけた上で、外部との関係を管理するための「基地」である。だが「基地」は、具体的な物質的空間を指しているわけではなく、戦略的主体が自らに存在の正当性を付与することのできる抽象的な場を指している。
- 17) 加藤もまたド・セルトーを引用して述べるように、「管理領域」とは「戦略」の空間である。だがここで興味深いのは、「管理領域の全域化」によって消滅した「隙間」を現動化させるのは、自らの身体（物質的実在）を表象することであるという指摘である〔加藤 2009：143-144〕。「路上」を「隙間」の代表的形象と考える本稿に引きつけながら加藤の指摘を換言すれば、「路上」という公共空間が管理領域化されるなかで、それを再び取り戻す（つまり、「隙間」を現動化させる動因）は、都市的空間を社会空間として生きる者の実践であるといえよう。それは管理領域における実践であるがゆえに、「反抗」や「抵抗」といった性格を帯びるが、しかし同時に、そこが戦略的主体の所有物ではないということを示すことでもある。したがって「戦略」の空間である「管理領域の全域化」とは、戦略的主体による一方的な力のベクトルのみに注視し、都市的空間を鳥瞰的かつ客観的に捉える際に初めてそのように見えるのであって、実際に空間を生きる者にとって、必ずしも全ての都市的空間が一様に管理領域化しているわけではない。
- 18) 同様に、若宮大通公園において行われた支援者とホームレスらによる抗議が、結果として当日の工事を中止させたのは、「路上」という支配空間に、交渉を可能とする「真正性の水準」〔レヴィ＝ストロース 1972；小田 2008〕における相互交渉の場が、行政職員とホームレスないし支援者との間に残されていたからであると考えられる。
- 19) 確かに日本と欧米とでは「ホームレス」概念が指し示す対象に大きな差があるため、ここでウォルチとロウの研究を持ち出すのは多少の誤解を生むことになるが、しかし「路上」における社会的ネットワークが、「移動」を通じて構築されているという彼らの指摘は貴重である。とくにウォルチとロウの研究で興味深いのは、「ホーム」を基点とした家族や友人、社会運動家たちとの関係性を概念化した「ホームのネットワーク（homed network）」と、「ホーム」を基点としない露店商や近隣住民たちとの関係性を概念化した「ホームレスのネットワーク（homeless network）」とを区別し、路上生活のダイナミクスを示そうとした点にある。
- 20) 人類学者である小田は、固定的なアイデンティティと結びついた「共同体」を避けて提唱されたH・ベイの「一時的自律ゾーン」やJ・パトラーの「創発的連帯」に拠らず、あくまで従来の「共同体」概念を脱構築しながらも、そこに固定的なアイデンティティを結び付けない、「非同一性による共同性」〔大杉 2001〕を含むものとして「共同体」概念を再構築しようと試みる。このような試みを小田が図るのは、19世紀の社会学において「発見」された「共同体」概念とそれに対置される「公共性（ないし市民社会）」の二元論を乗り越え、実際の共同体がこの図式を受容しながらも、どちらにも結びつかない「何ものか」を維持していくための戦術とその実践に、人類学的視角を確保するためである。

- 21) フランスの人類学者であるマルク・オジェは、現代世界のすべての特徴が凝縮されている今日の都市の特徴として、「非-場所」の増殖を指摘する[オジェ 2002: 245]。オジェのいう「場所」とは、アイデンティティ付与的、関係的、歴史的な場所であり、したがって「非-場所」とは、それらが否定された場所をいう。すなわち、ある場所との結びつきから自己確認ないし自己規定を行えず（非アイデンティティ付与的）、そこを基点に他者と相互に結びつく関係性をもたず（非関係的）、またそこでの活動の痕跡を認めることができない（非歴史的）場所が、「非-場所」である。概して「路上」とは、一般的には「非-場所」の代表的形象であるといえる。

参考文献

青木秀男

1989『寄せ場労働者の生と死』、明石書店。

2000『現代日本の都市下層——寄せ場と野宿者と外国人労働者』、明石書店。

オジェ、マルク

2002『同時代世界の人類学』、森山工（訳）、藤原書店。

ビッグイシュー日本編集部（編）

2010『路上のうた ホームレス川柳』、ビッグイシュー日本。

ド・セルトー、ミシェル

1987『日常実践のポイエティック』、山田登世子（訳）、国文社。

藤井克彦、田巻松雄

2003『偏見から共生へ——名古屋発・ホームレス問題を考える』、風媒社。

Hopper, Kim

1991 Symptoms, Survival, and the Redefinition of Public Airport: A Feasibility Study of Homeless People at a Metropolitan Airport. *Urban Anthropology* 20 (2): 155-175.

岩田正美

2000『ホームレス／現代社会／福祉国家——「生きていく場所」をめぐる』、明石書店。

2007『現代の貧困——ワーキングプア／ホームレス／生活保護』、筑摩書房。

笠井和明

1995『いわゆる「ホームレス」問題とは——東京・新宿からの発信』『寄せ場』8: 5-14。

加藤正洋

2009『ストリートの具動化——規律—管理社会をめぐる時間地理学からの展望』『ストリートの人類学 上巻』、関根康正（編）、国立民族学博物館調査報告 80: 133-145。

北川由紀彦

2005『単身男性の貧困と排除——野宿者と福祉行政の関心に注目して』『貧困と社会的排除——福祉社会を蝕むもの』、岩田正美、西澤晃彦（編著）、pp.223-242、ミネルヴァ書房。

小玉徹、中村健吾、都留民子、平川茂（編著）

2003『欧米のホームレス問題（上）——実態と政策』法律文化社。

厚生労働省

2003『ホームレスの実態に関する全国調査報告書』厚生労働省。

2007『ホームレスの実態に関する全国調査報告書』厚生労働省。

2008『ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果』厚生労働省。

2009『ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果』厚生労働省。

2010『ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果』厚生労働省。

リーチ、エドモンド

1974『人類学再考』、青木保、井上兼行（訳）、思索社。

レヴィ＝ストロース、クロード

1972『構造人類学』、川田順三ほか（訳）、みすず書房。

中根光敏

1998『都市空間に於けるストリートをめぐるポリティクス——野宿者問題の再構成にむけて』『差別問題の構成をめぐる社会的ダイナミズム』広島修道大学研究叢書第104号：1-39。

1999『排除と抵抗の現代社会論——寄せ場と『ホームレス』の社会学にむけて』『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』、青木秀男（編著）、pp.75-95、松籟社。

2002『社会問題の構成／排除——野宿者問題とは何か？』『社会的排除のソシオロジ』広島修道大学研究叢書第122号：1-29。

名古屋市役所

2004『名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画』名古屋市役所。

2009『第2期名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画』名古屋市役所。

二文字屋脩

2011『『ホームレス』であること——名古屋市におけるホームレスの経験とその解釈』『白山人類学』14、印刷中。

西澤晃彦

1997『都市下層としての野宿者——『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート』『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』、田松松雄（研究代表）、文部省科学研究費補助金総合研究（A）成果報告書：79-90。

小田亮

2004『共同体という概念の脱／再構築——序にかえて』『文化人類学』69(2)：236-246。

2008『『真正性の水準』について』『思想』1016：297-316。

大杉高司

2001『非同一次性による共同性へ／において』『人類学的実践の再構築——ポストコロニアル転回以後』杉島敬志（編）、pp. 271-296、世界思想社。

Simpton, J. A. and E. S. C. Weiner (eds.)

1989 *The Oxford English Dictionary (second edition)*, Clarendon Press.

Snow, D. and Michael Mulcahy.

2001 Space, Politics, and the Survival Strategies of the Homeless. *American Behavioral Scientist* 45: 149-169.

田巻松雄

1999a『笹島』『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』、青木秀男（編著）、pp. 71-74、松籟社。

1999b『寄せ場と行政——笹島を主な事例として』『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』、青木秀男（編著）、pp. 227-253、松籟社。

東京都企画審議室

1995『新たな都市問題と対応の方向——「路上生活」をめぐる』、東京都。

妻木進吾

2003『野宿生活：『社会生活の拒否』という選択』『ソシオロジ』48(1)：21-37。

渡邊欣雄

1990『民俗知識論の課題——沖縄の知識人類学』凱風社。

Wolch, Jennifer and Stacy Rowe.

1992 On the Streets: Mobility Paths of the Urban Homeless. *City and Society* 6(2)：115-140.